

エルネスト・アンセルメにおける「音楽的時間」論

船木理悠 (同志社大学)

著名な指揮者であるエルネスト・アンセルメ (Ernest Ansermet, 1883 - 1969) は、『人間の意識における音楽の諸基礎』(*Les fondements de la musique dans la conscience humaine*, 1961、以下引用では FM と略記し巻号と頁を付す) において、サルトルの影響をうけつつ、独自の音楽美学を展開したことが知られている。ところで、エリック・エムリー (Eric Emery) が指摘するように、この著作は「音楽における時間の問題」に多くの頁を割いており (Cf. Emery, *Temps et musique*, 1975, p. 473)、また、アンセルメは個別に「音楽的時間」(*Le temps musical*, *Micromégas VI: Le temps et la musique*, 1970, p. 65 - 71) という論考を行っている。

つまり、アンセルメの音楽美学は、20世紀の音楽美学の主要なテーマの一つであった「音楽的時間」(*le temps musical*) の問題と関わるものとして捉えることができるのである。しかしながら、先行研究においては上記のエムリー以外には「音楽的時間」という観点からアンセルメの思想を捉えたものは見られない。また、エムリーは「それ[音楽的時間]はその起源を身体的時間性から引き出している」(Emery, *op. cit.*, p. 475) とし、アンセルメの著作における音楽的時間と「身体」(*le corps*) の関係に言及しつつも、アンセルメの美学における身体の位置づけ自体には触れていない。

そこで、本発表は、アンセルメが自らの著作を「音楽についての長い現象学的研究の帰結」(FM I 7) だとしていることから、サルトルの現象学との関係に注目しつつ、以下の手続きで、アンセルメの音楽的時間論と身体との関係を考察する。

まず、アンセルメの「音楽的時間はカダンス的時間[un temps *cadenciel*]である」(Ansermet, *le temps musical*, p. 71) という主張に注目し、この「カダンス (*la cadence*)」が対立する要素の交代からなる構造であるとされており (Cf. FM II 8)、また、カダンスが呼吸や脈拍といった身体的なものに結び付けられていることを確認する。続いて、身体を持つ反復性が世界における「時間性の出現[L'apparition de la temporalité]」(FM II 9) の契機だというアンセルメの主張を示す。最後に、この身体的なものを、アンセルメがサルトルの現象学に基づいて、意識にとって特権的なものだと捉えていることを示し (Cf. FM II 16-18)、現象学的身体論の応用としてアンセルメの音楽的時間論を位置づける。